生活

✉seikatsunews@asahi.com

家族なのに… 法と社会の壁 下

多様性 支えたい

さまざまな家族の形が広がる中、法や社会をどう考えていけばいいのでしょうか。家族をめぐる裁判などにかかわってきたNPO法人の代表理事と弁護士に話を聞きました。

子を守らず 傷つける現実

NPO代表理事 井戸正枝さん

お父さんはだれですか？ その人のことを、なぜ父親と言えますか？

「似ている」「同居している」は間違い。父親を決めるのは民法772条。「妻が婚姻中に懐胎した子は夫の子と推定する」という規定だ。

「離婚後300日以内に生まれた子は前夫の子と推定する」とも定める。でも、妊娠から出産までは260～280日程度。私も当事者になるまで知らなかった。前の夫と別居後に離婚し、今の夫の子どもを出産したのは離婚後265日目だった。認知裁判を経て、ようやく子どもの戸籍ができた。

こうした認知請求などの調停は20

1965年生まれ。離婚や養育費に関するコンサルタント会社「トレジャーシップ」社長。前衆議院議員。2004年、民法772条の見直しを目指すNPO法人「親子法改正研究会」を設立。

12年の受け付け分だけで約3千件。特殊な人の問題ではない。子どもを守るための法律が、子どもやその家族を傷つけている現実はいたたまれない。

国は、ある時は婚姻を、ある時は血縁を重視する。私が裁判で「前夫との離婚成立後に妊娠した。子どもの父親は今の夫」と主張しても、「親子関係は血縁だけで決まるわけじゃない」と言われた。離婚してすでになくなった婚姻で親子関係を決めるのはおかしい。一方、女性から性別変更した男性のケースでは、「血縁がないのは明らか」として父子関係を認めなかった。

法律が男性目線でつくられていると

言えば、女性だけが離婚して半年間は再婚できないという民法の規定。「女性は離婚後しばらくおとなしくしておけ」という意図が透けて見える。

民法には昨年12月まで、非嫡出子の遺産相続は嫡出子の2分の1という規定もあった。母親側の「どちらも自分の子なのだから財産は平等に分けたい」という視点が欠けているものだった。

最高裁の違憲判断を受けて規定は撤廃されたが、撤廃を議論した自民党法務部会でも、「家族制度が崩壊する」などと異論が出た。昔ながらの意識の根強さを感じる。

親子や家族という大切なことを決めているのが民法や戸籍法といった法律。今の法律には、今の家族をどう守るかが求められるはずだ。社会や医学の移り変わりを考慮し、いろいろな家族があっていいと堂々と言えるものを目指すべきだ。（聞き手・中塚久美子）

事実積み重ね 社会変える

弁護士 山下敏雅さん

性同一性障害のため女性から性別変更した男性が、第三者から精子提供を受けて妻との間にもうけた長男の戸籍について、父欄に名前を記載するよう求めた裁判で、最高裁は昨年12月、男性を戸籍上の父と認めた。

性同一性障害特例法ができ、性別変更で夫になることを認めているのに、父になることを認めないのは許されないという判断だった。その人がその人らしく生きられる憲法の幸福追求権の理念が織り込まれている。

男性が出生届を出した際、国は戸籍の父欄を空白にする取り扱いをした。

1978年生まれ。「GID（性同一性障害）・法律上も父になりたい裁判」の弁護団長を務めた。「LGBT支援法律家ネットワーク」を作り、セクシュアルマイノリティーが抱える問題に取り組む。

男性は悩んだ末に子どもをつくることを決断し、父として懸命に育ててきたのに。子どもの養育環境を確立するために法律があるのに、こんな理念のない対応はおかしい。

いろんな家族の形が生まれている。そうした家族を社会が受け入れていけば、国もその流れに沿って保護する家族のあり方を考えるべきだ。今回の判断も、現実に対応しようとしない立法や行政に対する司法側のメッセージだった。

愛する人と真摯に家族を築いていく。そんな事実の積み重ねが社会を変え、裁判所を変え、法律を変えることにつながるのではないだろうか。

別姓のまま夫婦になりたいと考え、婚姻届を出さずに事実婚の道を選ぶ人は数多い。日本では同性婚はできないが、同性のカップルで暮らし、養子を迎えて子育てをしたいという人もいる。パートナーのことを他人扱いせず公的な関係として認めてほしいという思い、自分が受けてきた愛情を次世代にバトンタッチしたいという思いを、社会としてどのように支えるか。私たちみんなの問題だ。（聞き手・上原賢子）

家族をめぐる最近の動き（2013～14年）

9月4日	非嫡出子の遺産相続を嫡出子の2分の1とする民法の規定について最高裁が違憲判断
12月5日	非嫡出子の相続規定を削除した改正民法が成立
10日	女性から性別変更した夫と、第三者の提供精子で妻が産んだ子を、最高裁が法律上の父子と初認定
2月22日	日本産科婦人科学会が事実婚の夫婦も体外受精を受けられるよう指針を見直す方針を公表

患者を生きる 2462

子に希望を

安らぎに集う④

優秀者で卒業、力湧いた

養護学校の生活になじめずふさぎ込んだ千葉市の黒村桃子さん(23)は2009年春、地元の植草学園大に進学。新たなスタートを切った。

先天性の病気などの影響で、力が弱く、疲れやすい。移動には車椅子が欠かせなかった。

大学側は、手厚いサポートで迎えてくれた。90分の授業は体力がもたないため、専用の休憩室を設置。折りたたみ式の簡易ベッドを各棟に準備し、横になりながら受講できるよう配慮してくれた。

「これだけしてもらって、さぼれないな」。授業はほぼ休まず、障害者教育などの勉学に励んだ。

その年の秋、将来を決定づける出来事があった。母操さん(53)と姉(26)の3人で北海道美瑛町を訪れたことだ。数年前、友人と旅行した操さんが一目ぼれし、移住を考えていた場所だった。

遮るものがない広い空、なめらかに延びる丘を見て回った。宿泊したコテージの窓からは見たこともない数の星々。病院の角張った世界とは正反対で、魅了された。

将来は「普通の就職は体力的に難しいだろう。でも、しっかり働きたい」と思っていた。その考えと重なり、この土地でペンションを経営しようとひらめいた。病気で思うように旅行が出来なかった経験をもとに「誰もが行きやすい場所」を目指すことに決めた。

めぼしい土地を見つけては、持ち主に手紙を書いて送った。「どうか話を聞いていただけないでしょうか」「障害があっても自由に自然を感じる空間に身を置くサポートをしたい」

大学の卒業式で母(右)とともに。自分に自信を持てた4年間だった ＝黒村さん提供

反応はほとんどなかった。農地が多く、住宅を建てられる土地はそもそも少なかった。

その中で、連絡をくれたのが町内で牧場を経営する高橋洋美さん(66)。観光スポットの「赤い屋根の家」が見渡せる場所に500坪を借りることが決まった。高橋さんの紹介で、東京都の建築家・高山正樹さん(46)に建物をデザインしてもらうことになった。

そうして13年3月、大学卒業を迎えた。成績優秀者の一人に選ばれた。

客観的に人から評価されたのは、初めてだった。「努力って報われるんだ」。ペンション建設に向け、力が湧いた。

■ご意見・体験は、〈メール〉iryo-k@asahi.comへ。

「患者を生きる」は、有料の医療サイト・アピタル（http://apital.asahi.com/）で、まとめて読めます。

コラム6年 動物への愛

朝日新聞大阪本社発行の夕刊で昨年3月まで6年間連載された人気コラム「ますみ先生のにゃるほどジャーナル」が本になった。

著者の「ますみ先生」こと石井万寿美さん(52)は、大阪府守口市で動物病院「まねき猫ホスピタル」を開く獣医師。日々やってくる犬や猫の病気や正しい飼い方、「家族」を心配する飼い主の不安や愛情など、街の動物病院ならではの話題を軽妙なタッチでつづった。石井さんは「動物を飼っている人はもちろん、人生に悩む人にも読んでほしい。ちょっと笑うことで、元気になってもらえれば」と話す。

（青土社、税別1800円）

ひととき

ええ街 大阪なんやわ

3月の3連休前日の夕方、大阪のJR海老江駅のホームのベンチ脇で、女子高生が苦痛に顔をゆがませて倒れていました。

ベンチに腰かけ読書に夢中だった私は「おい、どうした」という男性の声で初めて異常に気づきました。

私は聞きました。「おなか痛いの？ 生理痛？」「そうです」。彼女の小さな声で痛みの原因がわかると、オバチャンパワー全開です。「すみません、誰か痛み止めないですか」。大きな声で周りの人たちに呼びかけました。

居合わせた若い女性がバッグから鎮痛薬を取り出し、お水を買いに走りました。別のもっと若い女性は倒れた彼女の携帯電話で家族に連絡を。電車から降りてきたサラリーマンも「駅員さんへ連絡しましょうか」と、代わる代わる声をかけてくれました。そうするうちに、駅員さんが車いすで彼女を駅員室に連れて行きました。

優しい心をもったたくさんの方々のおかげで、彼女は危機を脱したようです（彼女の家族が来るまで付き添えなかったことが気がかりでしたが）。

大阪の心は本当に温かい、ええ街大阪なんやわ、と思いました。

（兵庫県西宮市 上田 まり子 会社員 63歳）

「ひととき」募集します

本文500字以内。住所、氏名、職業、年齢、電話番号を添えて、〒530・8211（住所不要）朝日新聞生活文化部「ひととき」係へ。ファクスなら06・6201・0179、メールなら o-hitotoki@asahi.comへ。朝日新聞社の電子メディアにも掲載されることがあります。

料理メモ

春野菜の切りゴマあえ

1人前約80キロカロリー、塩分1.3グラム

（スマホのみ）

【主な材料・2人前】 ウド正味50グラム、水菜40グラム、ニンジン20グラム、ミツバ半把、生シイタケ2枚、白ゴマ大さじ2

【作り方】 シイタケの軸を除き、トースターで約7分焼き千切りにします。ウドを長さ3センチに切り、厚めに皮をむき千切り後、水につけあくを抜きます。水菜とミツバは長さ3センチに切り、ニンジンも長さ3センチの千切りにします。ゴマを軽く温め、包丁で切り、香りを出します。野菜を混ぜ、ゴマと合わせ器に盛ります。しょうゆ、だし汁各大さじ1弱、砂糖小さじ半分を合わせ、食べるときにあえます。（約15分）

世界的にも人気の高いフランス（一部ベルギー）産のフレンチリネンを100%使用。吸水性が高く、清涼感のあるやさしい肌ざわりは、この天然素材ならではです。

着ごこちのよさを追求した縫製
脇や腕部分には、縫いしろが隠れて裏側の布端が肌にあたらない“伏せ縫い”を採用。一枚で着ても快適です。

着やすくスッキリ見えるシルエット
実寸は変えずに、アームホールや肩の傾斜のバランスを細かく調整。胸まわりのダボつきもなくしました。

素材、着ごこち、シルエット、すべてが自信作です。 プレミアムリネンシャツ（長袖）

4/4（金）-4/7（月）期間限定価格
Men Women ¥1,990+消費税

ユニクロ UNIQLO LifeWear

※オンラインストアでは、一部商品において特別サイズ（MENは4XLまで、WOMENは3XLまで）を取り扱い販売中です。詳しくは、WWW.UNIQLO.COMまで。※近日中に再度、限定価格にて販売する場合があります。